本の読み方をめぐって

― 線引き書き込みについて考える ―

How to read books :
with observations on marking and underlining

林　　哲　也
図書館学課程非常勤講師

抄録：

図書館の本への書き込み被害への対策として、利用マナーやモラルに訴えるよりも、個人の私有物か公共の財産かにかかわらず、そもそも本はノートではないのだから、書き込みする対象物とは始めから全く思ってもみないような人が増えるよう誘導したほうが、被害予防に効果的ではないか。そのために、身近な日常生活からの比喩やアナロジーを用いて有害無益をアピールすることを試みる。

キーワード： 読書法、書き込み被害、図書館利用マナー、記憶術、情報整理

Key Words： Reading method, Marking and underlining, Library use manner, Mnemonics, Information management

はじめに

「読書法」や「知的仕事術」の類書には、本に線引き書き込みしたりページを折ったりしながら読むことを勧めているものが多数あります[1)]。しかし、統計やアンケート、対照実験などを論拠に書き込みの効果効能を検証したり、書き込みを実行しているおかげでこんなに良いことがありました、という因果関係を実証的に示したりすることもなしに、漠然とした主観的な信念や印象だけに基づいて、原本に直接書き込む奨めに短絡しているものが大多数です。本を読んで何かを書き記すことがもし有意義であるとしても、書き込む先が図書の原本に直接であることに合理的な必然性があるとは思えません。

私物の本に線引き書き込みすることを有益と考え、快適と感じるかどうかは、個人の趣味嗜好の次元領域に属することで、これに理論的に対抗することは、食べ物の好き嫌いを栄養学的な理屈を説いて変えさせようとする努力にも似て、困難と考えられます。けれども、明確な目的意識

のもとに効果効能を確信してではなく、ただなんとなく線引き書き込みしているだけの読者に向けて、身近な日常生活からの比喩やアナロジーを用いて有害無益をアピールしてみます。

昔からおこなわれてきたこと

「文章がいいなあと思った所には赤い線を引く、思想がいいなあと思った所には青い線を引く」[2)]。「本に線をいれる個所にはあきらかにふたつの系列がある、ということである。第一の系列は、「だいじなところ」であり、第二の系列は、「おもしろいところ」である」[3)]。文筆業や研究者といった一部の特殊な人々の場合には、読みながら書き込んだ結果を自身の著作活動の場にフィードバックして活かす機会があるのかもしれませんが、そのようなプロフェッショナルの言うことをアマチュアが真に受けて実践してしまうのは、たとえば一般家庭の台所に飲食店の業務用の器具や食材を揃えるような、身の丈に合わない過剰投資ではないでしょうか。

ところが、書き込みに積極的な意義をみとめる考え方は古来からのものだったようです。「今では古書に書き込みがあるといやがられるが、江戸時代までは逆だった。むしろ書き入れをすることで、より成長した書物になる。それが次の読者を呼び、影響力を増すことにつながる。読者も書物を後世に残す努力を積み重ねたのだ」「そのため、和本はそれを考慮に入れてつくってある。どんな本もわざと上をあけておくのである」[4)]。

図書館の蔵書を書き込みで汚すことを「広く行われている賤民的（せんみんてき）習慣」weit verbreitete pöbelhafte Sitte [5)] として「厳に戒めた」[6)] ケーベル先生ですら、自分の個人蔵書には線を引き「巻末の餘白に注意すべき事項とその頁とが鉛筆でうすく書き込まれて」いることも多かったそうです[7)]。夏目漱石の小説（フィクション）『三四郎』の図書館では「どんな本を借りても」「書中ここかしこに見える鉛筆のあと」（第 3 章）がありました。

別媒体にメモをとる方がはるかに有益

最初からノートやメモ用紙やパソコンに書けば良いものを、なぜ原本をむやみに汚そうとする[8)]のでしょうか。特に理解に苦しむのは、手元に所有して常に参照できる個人蔵書の場合はいざしらず、図書館の本に傍線や書き込みをする人たちが少なからず実在することです。どうやら、身体的動作自体が記憶の定着に有効だ、「目や手を動かさないと身につかない」[9)] という、「受験で暗記をするために参考書に線を引くのと同じ」[10)] 感覚に基づいていると推測されます。けれども逆は必ずしも真ならず。目や手を動かしさえすれば身につくというものでもありません。自分の個人所有物の場合でも、原本にただ書き込んだだけでは、どの本のどこに書き込んだか思い出せず、大部分は使い物にならないのではないでしょうか。直接書き込みする代わりに別媒体にメモをとる方がはるかに有益なはずです。「あとで役に立つかどうかという点でいえば、格段に抜き書きである」[11)]。 物理的に原本とは別個独立の媒体で手元に保管しておいた方が、後日の検索にも利用にも有利です。また、原本は手放すことができ、保管スペースに窮することも軽減されます。

無意味に本を汚すことはやめたほうがいい[12)]

本に書き込みすることは喫煙にも似て、害多くして益少ないからやめたほうが良いと言いたいけれども、各自の趣味嗜好に属する習慣として個人の領域で喫煙する人までは咎めだてするわけにもいきません。けれども公共の場で他人に迷惑をかけることについては、マナー違反として禁じることが近年は一般にも合意されるようになってきました。本人は他人に迷惑をかけていないつもりでも、たとえば引退時や死亡後に遺された大量の蔵書が書き込みだらけだったとしたら、家族は処分に困ってしまいます[13)]。

書き込みや汚損のある本は、図書館に寄贈するにも古書店へ売却するにも不適です。線引きや書き込みをしなくてはじゅうぶん読んだ気がしない、ということが習慣化してしまうと、借りて読むという行為自体に支障をきたすのではないでしょうか。購入による入手の可能な本の範囲は、出版物全体のうちのごく限られたわずかな部分に過ぎません。新刊書は短いサイクルでたちまち絶版になります。けれども図書館を活用すれば、古書店を含めても入手困難な本を容易に読むことができます。借りて読むことをあらかじめ敬遠し、読書対象範囲を自らむざむざ狭めてしまうことは無益です。購入不可能な文献を図書館その他で利用する際の練習／トレーニングという意味でも、自分で買った本も含めて、原本を汚さない読み方を日頃から習慣として実践しておくことをお勧めします。

私物つまり個人蔵書に限っては、本人が書き込みすることは個人の自由ではありますが、本に余計な書き込みをすると、自分で再読する際にも邪魔・目障りになります[14)]。他人に貸し出す際も恥ずかしい[15)]。古本屋に売却する際の商品価値も低下させます。

飲食になぞらえて考える

たとえば家庭内の日常の食事で、直箸で食べてしまった残りは、冷蔵庫に保管しても消費期限は短命です。取り箸しか触れさせないよう習慣付けておけば、みんなが気持ち良く食べられます。書籍の所有は個人に属してしまう傾向があり、書棚をシステマティックに共有する家族は稀かもしれません。一般家庭では、新聞は共有が通常で、雑誌も複数のメンバーが同じものを読むことがよくあるでしょう。辞書や事典類、実用書、文学全集はどうでしょうか。小説や単行書になると、属人性が高まる、個人の占有物とみなされる傾向が強まると考えられます。箸、飯碗、湯呑などは家族の銘々のものを決めていても、フォーク、スプーン、皿、汁椀、などは誰のものとも特定しない同じ型のものを複数個用意している家庭が多いでしょう[16)]。本に書き込みするのは、たとえ家族でも共有しない歯ブラシのような使い方をしてしまうことだと思います。バスタオルを家族ひとりずつ個別で使うかどうかは、各家庭毎の生活習慣によりまちまちのようです。本に書き込みしなければ、洗面所の手拭きタオルのように家族共有で使えます。

書き込みしてもどうせ忘れる

線引き書き込みしておくと、再読するときに役立つとよく言われますが、どれほどの割合の本が実際に再読されているのか疑問です。「現実に、一度読んだ本の九割以上は二度と通読するこ

とはおろか、部分的な参照もしない」[17]。将来再読しようと思ったとき、その本が手元にあることを当然のように考えている人も多いかもしれません。しかし、次々に溜まっていく本の置き場に窮し、やがて蔵書の一部を手放さざるを得なくなるのもよくあることです。本と一緒に書き込みも全て失われてしまいます。最初から本とは別のノートに書いておけば良かったのです。

「本はとにかく「身銭を切って」自分で買って読むものだ」[18]、「図書館で借りて本を読むんではだめだ」「借りてきた本で読んだ知識は借り物の知識に過ぎぬ」[19] という論者もあります。けれども、身銭を切ろうが切るまいが、忘れるときには忘れるものです。逆に、「借りた本でもそこから何か得がたいものに出会うことは充分にあり得」ます[20]。

受験勉強で暗記したはずの内容を社会人になってからまるきり思い出せないこと[21] からも自明なとおり、頑張って線引き・書き込みしても、必要のないものはどうせ忘れていくものです。「いろいろと書き込みまでして丹念に読んだ本」[22] ですら、読んだという事実自体をすっかり忘れてしまうことがあります。

読んだ本の内容のうちほんのわずかな部分しか覚えていられず、大部分は忘れてしまいます。それでちょうど良いくらいかもしれません。「覚えた事は忘れまいとする下司（げす）張った根性がいけないのだ」[23]。「精神的食物も、普通の食物と変わりはなく、摂取した量の五十分の一も栄養となればせいぜいで、残りは蒸発作用、呼吸作用その他によって消えうせる」「読み終えたことをいっさい忘れまいと思うのは、食べたものをいっさい、体内にとどめたいと願うようなものである」[24]。食べたり飲んだりしたものが本当に全部身に付いたら、体が巨大になり過ぎて軽快な動作ができなくなりかねません。

快適な利用環境の実現に向けて

電車の中で携帯電話は「マナーモードに設定の上、通話はご遠慮ください」と繰り返しアナウンスされています。にもかかわらず、通話している人を見かけることが稀ではありません。マナー違反が発生するのは、このくらいならば構わないだろうと自分勝手に心得違いをしているか、あるいは、悪いという自覚がない場合でしょうか。

公衆浴場で手拭やタオルを浴槽の中に浸してしまう人がいます。本に書き込みするのは、湯船の中でゴシゴシ体を洗うようなものです。合言葉は「汚さない、騒がない、独占しない」[25]。これはそのまま図書館の利用マナーにもぴったり当てはまります。ひとりひとりが他の利用者への配慮をこころがけることが、ほかならぬあなた自身の快適な利用環境の実現につながるのです。

おわりに

現実の切実な問題として、書き込み被害があります。事後的な消去作業（鉛筆の線引き書き込みに対する消しゴムかけ）を日々おこなっている図書館も多数あります。対策として、利用マナーやモラルに訴えるよりも、個人の私有物か公共の財産かにかかわらず、そもそも本はノートではないのだから、書き込みする対象物とは始めから全く思ってもみないような人が増えるよう誘導したほうが、書き込み被害の予防に効果的ではないでしょうか。

注

1）本に書き込みすることに関する資料集　http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/hon_kataru/katudou/021-b.html,（参照 2014-10-30）.

2）新渡戸稲造「読書と人生」. 鈴木範久編『新渡戸稲造論集』岩波書店、2007（岩波文庫、青 118-2）、p.165-186 より p.176.

3）梅棹忠夫『知的生産の技術』岩波書店、1969（岩波新書、青版 722）、p.111-112.

4）橋口侯之介『江戸の本屋と本づくり：続和本入門』平凡社、2011（平凡社ライブラリー、747）、p.222-223、p.242.

5）Koeber, Raphael. *Kleine Schriften.* Neue Folge. Iwanami, 1921, p.70.
久保勉訳編『ケーベル博士随筆集』第 22 刷改版、岩波書店、1957（岩波文庫、青 641-1）、p.141.

6）山下武『古書礼讃』新装版、青弓社、1991、p.25.

7）久保勉『ケーベル先生とともに』岩波書店、1951、p.151.

8）日本能率協会マネジメントセンター編『本 300％活用術：仕事力 & 人生力を磨く本の読み方・活かし方』日本能率協会マネジメントセンター、2011、p.82.

9）小笠原喜康『大学生のためのレポート・論文術』講談社、2002（講談社現代新書、1603）、p.111.

10）成毛眞『本は 10 冊同時に読め !』三笠書房、2008（知的生きかた文庫）、p.128.

11）山田太一「抜き書きのすすめ」. 三省堂編集部編『本と私：四十四人の体験的読書論』三省堂、1994、p.80-85 より p.80.

12）呉智英『読書家の新技術』朝日新聞社、1987（朝日文庫）、p.182.

13）飯澤文夫「蔵書の死際（特集 集書と整理）」『日本古書通信』63（9）、1998.9、p.20-21.

14）清水幾太郎『本はどう読むか』講談社、1972（講談社現代新書、297）、p.87-88.

15）串田孫一「本とつきあう法」. 植田康夫編『読書大全』講談社、1985、p.70-83 より p.80.

16）今井悦子「食卓風景に関する研究 I：埼玉県を中心とした地域の居住者における食器の属人性に関する実態調査」『日本食生活学会誌』13（2）、2002.9、p.121-127.
今井悦子「食卓風景に関する研究 II：食器の属人性および共用への抵抗感に関する地域比較」『日本食生活学会誌』13（3）、2002.12、p.183-191.
「銘々箸をほかの家族が使ったら気持ち悪い？」（発言小町）
http://komachi.yomiuri.co.jp/t/2008/1207/215805.htm,（参照 2014-10-30）.
「ハブラシの共有ってできますか？」（OKWave）　http://okwave.jp/qa/q3098215.html,（参照 2014-10-30）.
「『バスタオル』は、家族個別ですか？ それとも家族共用ですか？」（Yahoo! 知恵袋）
http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail.php?queId=4330828,（参照 2014-10-30）.

17）呉智英、前掲書、p.181.

18）齋藤孝『三色ボールペンで読む日本語』角川書店、2005（角川文庫）、p.30.

19）林望『知性の磨きかた』PHP 研究所、1996（PHP 新書、003）、p.151.
林望「図書館は「無料貸本屋」か：ベストセラーの「ただ読み機関」では本末転倒だ」『文藝春秋』78(15)、2000.12、p.294-302 より p.298.

20）諸橋孝一『図書館で考える道徳：書き込み被害をめぐって』鳥影社、2001、p.16.

21）前野隆司『思考の整理術：問題解決のための忘却メソッド』朝日新聞出版、2009、p.83.

22）Montaigne, Michel de. "Des livres". *Les essais*, Livre 2, chapitre 10.
第 2 巻第 10 章「書物について」ミシェル・ド・モンテーニュ、宮下志朗訳『エセー』3. 白水社、2008、p.163-191 より p.183.

23）内田百閒「百鬼園先生言行録」.『百鬼園随筆』新潮社、2002（新潮文庫）、p.271-329 より p.327.

24）Schopenhauer, Arthur. "Über Lesen und Bücher". ショウペンハウエル著、斎藤忍随訳『読書について：他二篇』第 26 刷改版、岩波書店、1983（岩波文庫、青 632-2）、p.129、p.137.

25）ぽかなび .jp「入浴マナー・入浴の心得」 http://pokanavi.jp/guide/manners.html,（参照 2014-10-30）.